

わたしたちは忘れません

まつおせいこ
松尾靖子ちゃんのこと



命の尊さをみつめ、子どもの安全を最優先に...

かぜの子クラブ

事故報告

事故の概要

- (1) 事故発生の日時 1990年8月22日(水) 午後1時50分頃
(2) 事故発生の場所 横浜プールセンター プール中央ステージ付近
(横浜市磯子区原町14-1)
(3) 事故当事者 松尾 靖子 (7才, 横浜市立本郷台小学校2年)

(4) 事故の状況

事故当事者は、小菅ヶ谷学童保育所の夏休み保育の一環であるプール行事に参加しプール中央ステージ付近で溺れているところを救助され、人工呼吸を受けたが回復せず、意識不明のまま横浜赤十字病院、さらに県立こども医療センターへ運ばれ治療を受けたが、8月26日(日)午後1時58分逝去されました。

(5) プール行事参加者

- 指導員 3名(1名はパートタイマー)
父母 4名(父親×3名, 母親×1名)
学童 19名(1年×7名, 2年×6名, 3年×3名, 4年×2名, 6年×1名)
中学生 1名(OB)

(6) プール施設状況

プールは大小5ヶ所あり、中央の大プールは二重になっていて、外側は浅く左回りに水が流れるプール。内側は中の島から中央ステージ迄25mあり、深さは中の島側(外側)が1.05mあり、中央に向かって段々深くなり、中央ステージ側では1.5mの深さになる。

深いプールの注意看板は中の島に3ヶ所立っており、そこには「ご注意(赤字)」の題字の下に青字で「このプールは中央に向かって深くなっております[1.05~1.5m](括弧および括弧内は赤字)ので小さい子や泳げない人は充分注意してください。(漢字にはふりがな付き)」となっている。

なお、このプールは小学生以上であればひとりでも入場可能であり、新聞報道によると当日の深いプールの監視員は3名であった。

(7) 当日の経緯

- 午前9時、学童保育所開所。10時まで子どもたちは勉強した。
 - 午前10時、子どもたちに電車乗車時の注意をした後プールに向けて出発した。
 - 午前11時過ぎ、プールに到着した。着替、シャワーの後、体操をしてプールの注意として時間を守ることを、グループで行動することを子どもたちに話した。
 - 午前11時30分頃、12時迄の約束でプールに入った。子どもたちのグループ分けは特にせず自然にできたグループに大人が付き添う体制で保育をした。
- 事故当事者は女子5人のグループに入り、指導員Aといっしょに浅い流れるプールを何度も回って遊んだ。途中2~3度深いプール入って遊んだ。
- 深いプールでは、プールサイドから深い方に立つ指導員に向かって子どもたちを泳がせた。事故当事者の水泳能力はバタ足程度で、まだ息継はできない程度だった。
- 午後12時から12時50分まで昼食をとった後、午後12時50分から2時までの約束で再びプールに入った。
- プールサイドに座ってプールに入る合図を待っていた子どもたちは、合図とともにいっせいにプー

ルに散って行った。

午前の女子 5 人のうち、浮き輪を持っていた 2 人が残り、事故当事者を含む他の 3 人は先にプールに入ってしまった。

午前中、事故当事者を保育していた指導員 A は、残った 2 人と他に浮き輪を持った 4 人を連れて保育をした。

一方、事故当事者を含む 3 人は、他の 1 人とともにグループを作った。

この女子 4 人(2 年×2 名, 3 年×2 名)のグループは大人が把握していない、監視の目から外れた存在になってしまった。

このグループは中央の深いプール、流れる浅いプール、滝のプールを転々としてしばらく遊んだ後、中央の深いプールに入った。深いプールでは事故当事者と他 1 人(2 年生)がプールサイドにつかまって遊び、他の 2 人(3 年生)が少し沖に出て遊んだ。さらに、この 2 人がひとりずつになった。この 1 人と事故当事者とがもうひとりを探しに行くことになり、行きかけたがプールサイドに残っていたひとりに待っているよう声をかけに三年生が戻り、再び元に戻った時、事故当事者の姿が見えなくなっていた。

沖から戻って来たひとりを含む 3 人で事故当事者を探した。

別のグループを引率していた指導員 B が、プールサイドにいた 1 人(2 年生)を見つけ、1 人であるので事情を聞いていると、他の 2 人が戻って来た。

指導員 B は子どもたちから事情を聞き、指導員 C の応援を得て事故当事者を探しはじめた。プールの中央ステージを見ると、人だかりがして人が寝かされて人工呼吸を受けているのを見つけた。子どもたちの「靖子ちゃんだ。」との声で指導員 C が確認に行き、そのまま救急車に同乗して横浜赤十字病院へ向かった。

事故の原因について

(1) 事故の直接的原因

靖子ちゃん達が、1 時間あまり大人の目から抜け落ちた状態で、小学生にとっては危険の多い深いプールに子どもたちだけで遊ぶことができた。

(2) 事故の間接的原因

参加者は、学童×19 人、中学生×1 人、幼児×2 人に対して、指導員・父母が 7 人と大人の比率が低かったわけではないが、結果として「大人の目から抜け落ちた。」、「危険の認識が十分徹底されなかった。」事には、指導・監視体制の不備があったと言える。

プールの危険性について注意がなかった。

当日の注意は、時間を守ることとグループ行動の二点だけだった。

また、施設側でもはっきりした表示や注意がなかった。

遊び方、グループ分けに問題があった。

自然発生のグループに大人が付き添う体制をとったため、グループの離合集散により大人の目から抜け落ちる子どもたちが生じた。当該グループ以外にも数人が大人の掌握外で遊んでいた。

また、好きな子同士が集まった結果、身長や水泳能力・プール経験など、様々な条件が異なりながらいっしょに遊ぶという危険性が生じた。

子どもたちを掌握する体制に問題があった。

・初参加の指導員や父母が多かったが、例年のことであり、下見や事前の打ち合わせをしなかった。

・当日の指導・監視の打ち合わせがなかった。

プール保育の前に、指導員と父母とで役割や保育分担について打ち合わせ・指示がなかった。
・マンモスプールの危険性に気がつかなかった。
子ども集団の監督・識別は、広さや混み具合から、個々にマークでもつけない限り困難であるのに、大人用プールに簡単に入れる広さの場所へ大勢の子どもたちを引率するのは問題があった。
・大人の引率なしで入ることができ、奥に行くほど深くなるプールにしては、監視体制が不十分だったと思われる。

(3) 事故の背景=プール行事の企画・運営上の要因

このようなプール保育は、実は今年だけではなく例年行なって来た行事である。また、小菅ヶ谷だけでなく本郷台も同様の保育を行なって来た。

すなわち、今回の事故はかぜの子クラブの誰にでも起こり得たのである。

行事の企画・検討が形式的だった

今回の夏休みプール行事も「例年通り」と言うことで、指導員・保育部会・役員会・父母会で承認されている。

しかし、今までにも迷子が出たり、役割分担が不十分で不安に思う親がいたにもかかわらず教訓の共有がなかった。

企画・検討・決定の過程が論議を尽くすことなく形式・前例主義に陥っていた。

今年度の特別な要素

子どもたちの人数、特に低学年層が増えたことにより危険性が増した。

夏休みの指導体制～小菅ヶ谷保育所では、学生アルバイトの廃止と「夏休み保育への父母一日参加」を行ない、新規の正規・パート指導員も加わり慣れない体制での夏休み保育だった。

指導員・親双方にこれまで以上の綿密な意志疎通が必要だった。

(4) 背景の根-父母会運営上の要因

指導員と父母の間で突っ込んだ検討と課題の掘り下げができきれなかった。

父母と役員との「距離感」...最近の父母会では日常保育や行事についての具体的議論が減っている。「例年通りだから」と父母が運営の主体から遠のいて「役員任せ、指導員任せ」の風潮を生み、父母の多様な職種や経験を反映したクラブ運営ができにくくなっていった。

指導員個々は、子どもについて素晴らしい技量を持ちつつも学童保育所指導員としての専門的研修の機会や組織内外における経験の伝え合いが不十分だったと言える。

過密...日常保育の検討ができないほど、今年度も過密対策で忙殺された。

子どもの安全を確保するための責任ある学童保育所の運営は、根本的には市の委託制度のあり方に関わっている。

3. 今後の方向

- (1) 運営委員会をはじめ専門家に指導を仰ぐ機会を広げる。
- (2) 日常保育や行事において「安全」を常時検討して行く。
- (3) 父母・指導員が自由・率直に自分の問題意識を出し合い、お互いの力を活かし合っより良いクラブの運営ができる父母会づくり。
- (4) 事故を忘れず教訓を語り継ぎ、今後の事故を防ぐ安全教育を行なって行く。
- (5) 指導員の専門的研修の拡充。
- (6) 学童保育の望ましいありかたの追求

「安全の日」に決めたことの発表

私たちは、靖子^{せい}ちゃんの命日の 26 日を「安全について考える日」として、靖子^{せい}ちゃんの事故を忘れないように、また二度と事故が起こらないように、毎月少しずつ話し合っています。

<小菅ヶ谷クラブ>

1. あそびのどうぐをきちんとかたづける。
2. どうぐをつかうあそびでは、まわりにきをつける。
3. すべりだいやブランコなどは、あんぜんにつかう。
4. ネットなどはたいせつにつかう。
5. しらないひとについていけない。
6. よりみちをしない。
7. ひとのいやがることをしない。
8. おうだんほどうやみちは、ただしくあるく。

<本郷台クラブ>

1. かえりみち、ほどうでふざけっこをしない。よりみちをしない。
2. しらないひとにこえをかけられても、ついていけない。へんなこともいわない。
3. たきびをするときは、バケツにみずをいれておいて、かならずおとながついているときにやる。
4. こうつうじこにきをつける。
5. あぶないところがあったら、せんせいにおしえる。
6. きけんなあそびは、やめよう。

(1991 年 3 月 30 日「子どもの安全と成長を願うつどい」より)

子どもたちの安全のために

これからのかぜの子の方針

1. **自分の家庭を知っているのと同じくらい、学童を知ろう。**
遊び相手の名前を知っていますか？
子どもたちはいろいろな子どもや大人に囲まれて育っています。学童が放課後の親代わりであるように、我が子だけでなく、かぜの子全体を見る親になろう。
2. **子どもの目の高さになって、まわりを見つめよう。**
予想のつかない動きをする子どもたち。危ないからと押し込めるだけではかわいそう。子どもの目の高さになってまわりを見つめ、こどものために、子どもの安全と成長につながる保育活動をつくろう。
3. **前例にとらわれず、常に新鮮な目で学童を見つめよう。**
「今までやっていたから」と安心せずに、日常の保育や行事は子どもたちのためになっているか、建物はどうか、遊び場はどうか、しっかり見つめ安全な学童をめざそう。
4. **親も指導員も率直に意見を交わし、ともに学童を守って行こう。**
家庭の団らんは安全な学童があつてこそ。子どもたちを守るために、豊かな放課後を持つために、人任せでなく親と指導員が協力し合って行こう。
5. **三つのかぜの子クラブは、これからも協力し合って行こう。**
それぞれのクラブは、これから独立して行きます。でも思いは同じ。
同じ願いの子どもと親と指導員がわかれて行くのです。
この集会をきっかけに、子どもたちの安全と健やかな成長を願って、三つのクラブは、これからも協力し合って行きましょう。

(1991年3月30日「子どもの安全と成長を願うつどい」より)

出典:「あゆみ-小菅ヶ谷学童保育所かぜの子クラブ 15周年の記録」(1997年3月1日)